



再生パルプを作る工程の前で社員と意見交換する長武志社長(右)

第2回

全国大学発ベンチャービジネスモデルコンテス

紙おむつをリサイクル

高齢者向けの紙おむつの需要が増している。使用済み紙おむつはこれまで、焼却処理されるのが当たり前だった。

紙おむつの販売を行っている長武志さん(63)は、当初、紙おむつを焼却処分しようとして九州で適地を探した。しかし、各地の焼却場でダイ

環境貢献賞

オキシソ問題が出てきたため、焼却処分を見直す必要性に迫られた。「紙おむつをリサイクルできればゴミの減量にもなるのだが……」と福岡大学の松藤康司教授(廃棄物工学)に相談したのだ。水と塩化カルシウム、使用

トータルケア・システム 本社・福岡市 社員16人

済み紙おむつを分離槽に一括に入れてかくはんし、ビニール、パルプ、汚泥などに分離する技術(水溶化処理技術と呼ばれる)を松藤教授と共同開発した。長さんは、この技術を生かし、「トータルケア・システム」を2001年に起業した。

病院や福祉施設から紙おむつを回収・分離して、出てきたパルプは建築資材の一部に、ビニールは固形燃料(RPF燃料)に、汚泥は土壌改良剤に再利用されている。

現在、福岡県を中心に1日約7万枚の紙おむつを回収している。ゆくゆくは一般家庭からも紙おむつを集め、「再生紙おむつ」作りに乗り出したいという。

「環境対策」時代の要請

大学発ベンチャーは、2001年に政府が打ち出した「患者の治療」を拒当領域とした「1000社創出」という目標を受けて急増し、現在1590社が誕生するまでに至った。

しかし、大学で生まれた技術を優先して商品化を急ぐあまり、商品やサービスを受ける消費者のニーズと必ずしも合致せず、経営の行き詰まる事例も見られる。好調に推移しているのは医療や情報技術(IT)分野などに限られているという。今回、最優秀賞を獲得したメテカルイメージラボと、優秀賞を受けたセ

法をいち早くクリアして、世界ブランドに飛躍する

ルジエンテックは、ともに「患者の治療」を拒当領域としていた。医療系ベンチャーが大学発ベンチャーを先導している現状を知らずも浮き彫りになった。一方、注目すべき動きも出ている。コンテスでは環境関連分野からの応募が14社のうち6社を占めた。環境貢献賞を受賞した「トータルケア・システム」を筆頭に、大学発ベンチャーのすそ野の拡大をうかがわせる。

「環境対策は日本人が得意なモノづくり技術が一番生かしやすい、日本がリーダーになりうる」と、福岡県・日本ベンチャー協会会長がこう語っていた。日本の大学発ベンチャーが環境技術の開発を巡る激しい競争を勝ち抜き、世界に雄飛することを期待したい。(北海道支社 瀬島義孝)